

明治初期の埼玉県の俳人の研究

小船 裕也

明治期において、文芸のひとつである俳諧が果たしてきた役割は非常に大きいものとされている。明治期の俳書や俳誌は非常に多く、またその種類も豊富である。しかし、こと埼玉県においては、その研究が十分でないとされている。県史や県内の俳諧研究を見ても、近世、特に江戸時代についての研究は進められているものの、明治時代、特に正岡子規以前についての研究は江戸時代の研究に比べると細部まで進められていないのが実情である。

そこで、具体的にどのような俳人がいたかを明らかにすることで、当時の埼玉県、武蔵国で俳諧がどういった人々の間で広まっていたのかを明らかにし、またその数や偏りから当時の俳諧の広がりや状況を分析し、県内での俳諧の伝播状況を明らかにする。

そのための方法として、本研究では当時の俳人を列挙した句集の人名録や名員録といった資料を用いる。今回は全国規模での俳人を収載した俳諧の資料を調査することで、全国の中での武蔵国がどれほどの俳諧の規模であったかを示すことができる。今回は、東旭斎による『明治新々五百題』に付されている人名録と、当時活動していた俳諧結社である教林盟社により出版された『結社名員録』の2つの資料を調査する。『明治新々五百題』に関しては山下泰史氏の論文で詳細に触れているため、それを参考にして調査を行なう。

内容を調査した結果、『明治新々五百題』には武蔵国出身の俳人が18名、そのうち現埼玉県域の出身が13名いた。また、『結社名員録』では武蔵国出身の俳人が68名、うち現埼玉県域の出身が34名いた。2つの資料間で重複して記載されている俳人が1名おり、精力的に活動していた人物もいたことが分かった。出版された地域や、結社の分社がある地域出身の俳人が多くなる一方、その中でも埼玉県の俳人が一定数いたことを示す手がかりとなった。特に『結社名員録』に関しては、分社があった現在の愛知県周辺よりも多くの俳人が名を連ねており、当時の武蔵国には影響力のある俳人がいたと考えられる。

当時の埼玉県域では、県内の大半の地域で俳人が活動しており、特に県東部の平野では多くの俳人が活動していた。また、街道や河川などの交通が発達し、それらを利用する人々の間で俳諧が流行していたということも埼玉県内で俳諧がさかんに行われた理由として考えられる。

今後は、より多くの資料を参照することで具体的な俳人の名前を明らかにするとともに、重複して記載されている俳人を分析することによって、他の県外地域の俳人がどれだけ精力的に活動していたのかも比較検討していく必要がある。

(指導教員 綿抜豊昭)